生きがいのある老後の暮らし

～幼老複合施設による団地コミュニティの再編～

Keywords
幼老複合施設　団地再生　超高齢化社会

DZ20662 吉本冴希

1. はじめに

日本の平均寿命は世界1位である。健康寿命が大切になり、病気の早期発見・生きがいの創出が重要となってきている。これらを解決する方法として、建築を通した地域包括ケアを提案する。

2. 研究背景と目的

2.1 研究背景

現在高齢者施設への入居待機者が増えており、増設傾向にあるが、地域社会との共生の選択肢として幼老複合施設というものがあることを知った。しかし幼老複合施設が身近にないことを疑問に感じ本研究を行った。

2.2 研究目的

幼老複合施設の現状調査と課題に対する提案を行う。

3. 調査内容

(1)幼老複合施設について

幼老複合施設とは保育園や児童館、小学校などのこども用施設と、老人ホームやデイケアサービスなどの高齢者施設が合築・併設されている施設である。

(2)幼老複合施設の現状

高齢者福祉施設と併設する保育所数は1997年から2000年で、1.8倍に増加しているが、介護士と保育士の負担が大きいことや、事故やトラブルの危険性、感染症のリスクが高いことから、分棟型が多い。2)

(3)高齢者とこどもの関係性

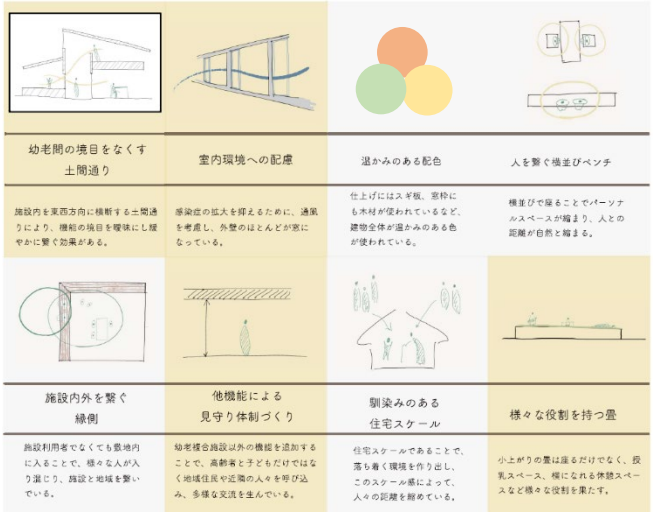
1920年代から日本は核家族化が進み、高齢者とこどもの接点が少なくなっている。しかし高齢者とこどもは相性がよいと言われている。高齢者はコミュニケーションを欲しており「話したがり」で同じ話をすることに苦労は少ない。

一方、こどもは成長の過渡期であり一度では満足できず毎日同じ絵本を読んだり、連日砂場で遊んだりと、繰り返しを好む。また「なぜ、なぜ」、「どうして、どうして」と質問を連発し、知識への欲求が高く「知りたがり」である。この「話したがり」と「聞きたがり」の関係は相性が良い。さらにこどもの承認欲求についても高齢者は「よき共鳴者」となり大きな存在となる。4)

(4)現地調査

春日台センターセンターと暮らしの保健室あつぎにおいて現地調査とヒアリングを行った。

高齢者介護や就労支援、放課後等デイサービスを行う拠点である春日台センターセンターではセンター長の安倍真紀さん、暮らしの保健室あつぎでは室長の島崎菜穂子さんにヒアリングを実施した。暮らしの保健室あつぎは、地域住民の医療やリフォーム、行政書士、介護など暮らしの中での相談事をまとめて引き受ける施設である。ジェラートは亡くなる直前でも食べれるものであることから、１階ではジェラート店を運営し、そこで得た資金で暮らしの保健室を運営している。異世代交流のために以下のような工夫があった。



(5)東京都23区内の高齢者が集中するエリアの調査

国勢調査によると、東京都23区内の町丁目のうち、高齢者が50%以上と集中しているエリアは15か所ある。その中から高齢者施設がある地域を除くと９か所に共通することとして、エリアの大部分を都営住宅が占めている。高齢者は57%でそのうちの単身世帯高齢者は72%と高い（図1.2）。1)

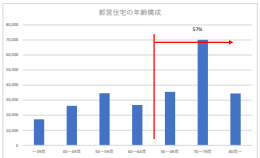


図1都営住宅の年齢構成
5)より作成

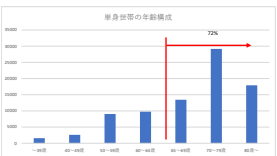
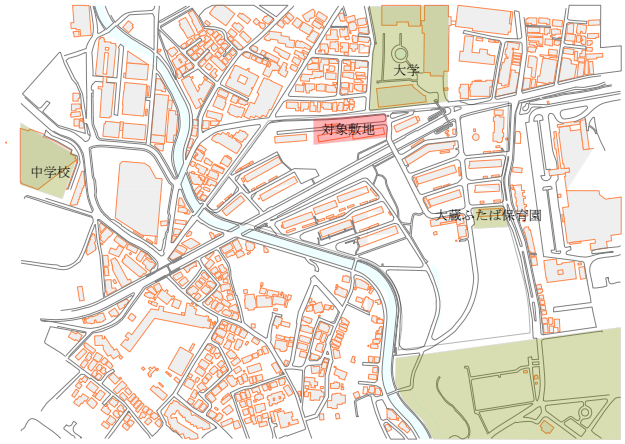


図2単身世帯の年齢構成
5)より作成

また都営住宅での孤独死件数も2016年までは年間400人台であったが、2020年には755人と増加し続けている。

研究指導：山代悟 教授　　Saki YOSHIMOTO

5.対象敷地－東京都世田谷区大蔵3丁目－



対象敷地は大蔵住宅28・29号棟周辺の6000㎡とする。
地形の特徴は最大16mの高低差と50年以上前から存在する林や近隣の仙川があり自然豊かである点の2つある。
老朽化に伴い2022年から建て替えが始まり、現在では入居募集が開始されている。高齢者の親族が勝手が違う新しい団地に住まわせることを不安に感じ、住み慣れていない地域にある高齢者施設への移住をした住民も少なくない。これにより、今まで作り上げてきたコミュニティから離れ、住み慣れたまちの居場所がなくなってしまう。1)

6. 仮説

建て替えを機に転移を余儀なくされた高齢者や新しく入居してきた子どもが生活する幼老複合施設を設計し、そこに地域住民が集う場を設けることで、地域の見守り体制を作り出し、建て替えによって壊れた大蔵住宅の団地コミュニティを再編できるのではないか。

7.設計趣旨

都営団地の建て替え事業に合わせて幼老複合施設を設計する。

7-1.コンセプト

都営住宅の建て替えに合わせて、イベントでの交流ではなく、自然な交流を作り出す幼老複合施設を目指す。またカフェ、図書室を併設することで、大学生や地域住民を施設内へ呼び込み、地域の見守り体制を作り出し、大蔵住宅の中心となる地域包括ケア、団地コミュニティ拠点の提案を行う。

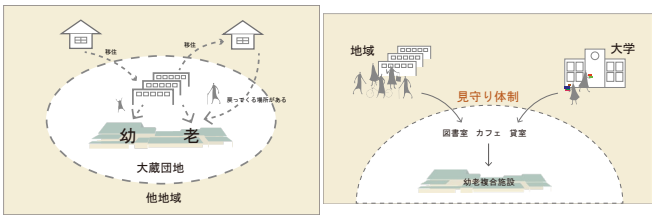


図 3他地域と団地のコミュニティ再建案及び
団地内の機能の追加による見守り体制づくりの提案

7-2.設計手法

(1) ゾーニング

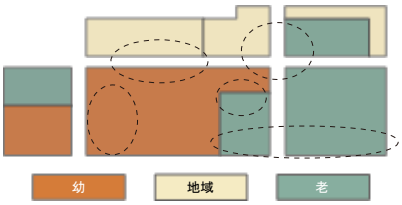


図 4ゾーニング案

幼稚園、高齢者施設、地域に開いている部分それぞれをこのように配置する。この配置によって、それぞれが混ざる部分、交流から離れる部分を作り出す。

(2) ダイアグラム

a. 土間通り

南北方向に2本、東西方向に1本の土間通りを設け、空間を6つに分ける。異なる機能を土間通りを介して隣接、分散配置することで、高齢者や子ども、地域住民が緩やかに繋がる空間を作り出す。

b. 空気環境への配慮

風通および採光を考慮し、壁面の多くを窓にするとともに、それぞれの屋根をずらし、隙間を作る。

c. 馴染みのある住宅スケール

天井高を最低2m、最高2.6mとし、住宅スケールにすることで、落ち着く空間を作り出す。

8. 終わりに

寿命が延びたことで、長く生きることに対して誰しもがネガティブに感じる瞬間がある。
独り身になることで生活の不安を感じやすいが、気にかけてくれる・気にかけたくなる関係性が作られることによって、少しでも長生きすることの不安を解消できたらと願う。

参考文献

1) 牛尾梓：東京23区にも「限界集落」15カ所　高齢化する地域、誰が支える？，2023年5月10日閲覧.

2) 北村 安樹子：幼老複合施設における異世代交流の取り組み，第一生命経済研究所，2003年8月1日

3)岡美千瑠， 宮本江里子， 飯田康太郎， 高橋紀行， 渡邊博一， 小宮隆太郎：少子高齢化における住宅政策～2050年、多世代共生の暮らしに向けて～，「都市政策研修」報告書.

4)多湖光宗：少子高齢化も安心！幼老統合ケア，黎明書籍，2006年6月20日．

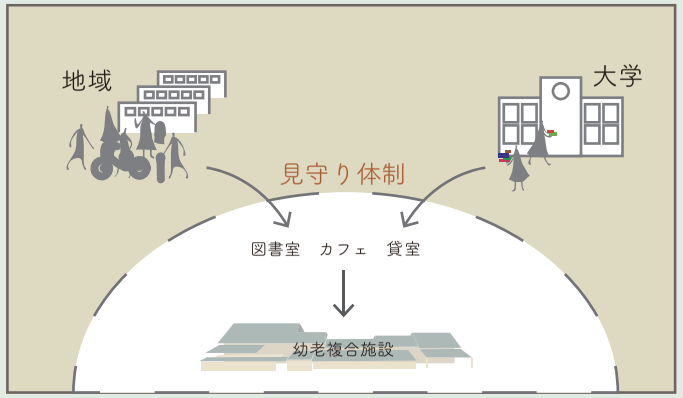
5)東京都住宅政策：都営住宅の現状【資料集】

子どもと高齢者がともに生活する幼老複合施設。ともに生活することは高齢者にとっては生きがいの創出、こどもにとっては死を身近に感じるなどのメリットがあるものの、現状では建築として交流の仕方を見いだせていない。そこで、老朽化による建て替えが始まった高齢者が多く住む大蔵住宅の一角に幼老複合施設を計画し、高齢者とこども及び地域住民の団地内の交流を提案する。

生きがいのある老後の暮らし
ー幼老複合施設による団地コミュニティの再編ー

DZ20662　吉本冴希

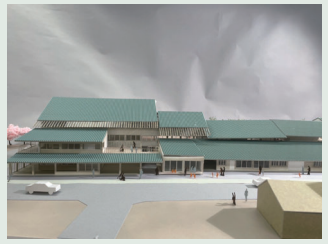
コンセプト



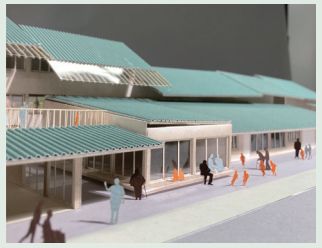
設計手法

土間通り

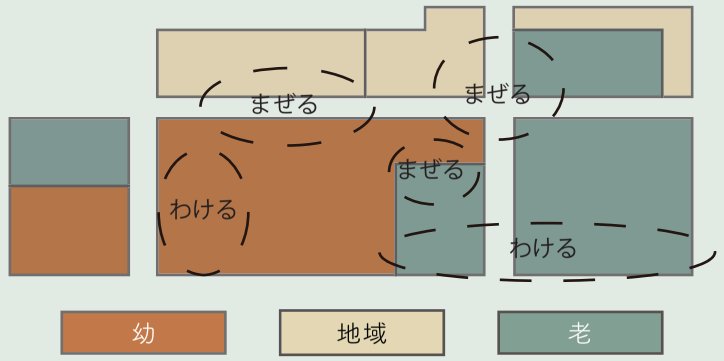
空気環境への配慮

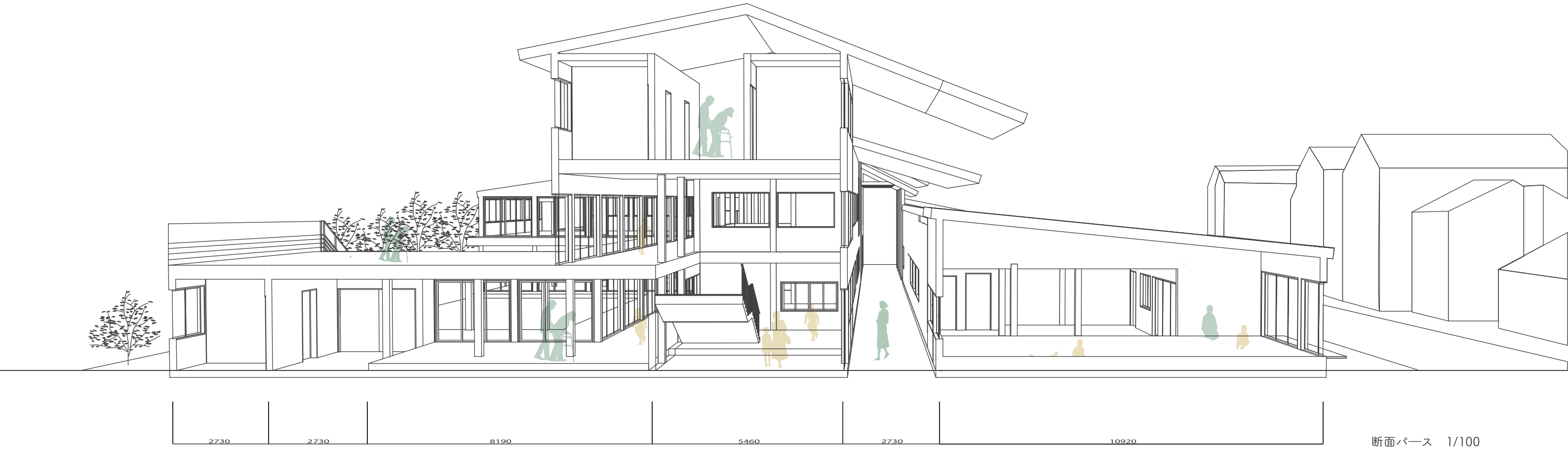


馴染みのある
住宅スケール



ゾーニング





断面パース　1/100